

内 資 人 考

春 名 宏 昭

はじめに

奈良国立文化財研究所が一九八九年七月に実施した第二〇〇次補足調査は、二条大路の南側路肩に掘られた東西溝の部分的な調査であった。⁽¹⁾この調査で出土した木簡の中に特に筆者の関心を引いた木簡がある⁽²⁾(二〇〇頁写真参照)。

・ 内資人宿 日下部乙万口
忍坂乙万口
尾張沙口

・ 天平八年四月廿日

内 資 人 考

この木簡は宿直木簡の一種であり、当番の人名を報告したものと考えられよう。三人の人名のうち日下部と忍坂は一般的に考えて、「乙万呂」でよからうが(以下「乙万呂」と記す)、尾張はこれだけでは推定は不可能である(同「沙口」)。また木簡は完形ではなく下部が欠損しているから、三名以外にも人名が列記されていた可能性

もある。

問題は「内資人」という聞き慣れない官職名である。資人は諸王・諸臣の従者であり、類似の存在としては天皇の内舍人・大舍人、中宮の中宮舍人、皇太子の東宮舍人、親王の帳内がいた。律令制以前は、『日本書紀』を見ると、例えば山背大兄王や輕皇子(後の孝徳天皇)・有馬皇子の従者が「舍人」と表現されており、皇子(後の親王に相当)や王(同諸王)の従者も「舍人」の範疇に入っていた。

『日本書紀』の「舍人」はトネリの和訓に漢字を当てはめたものであり、従って律令制以前は諸王以上の従者は全てトネリと呼ばれていたことになる。これに対して、諸臣の従者が「舍人」と記されている例はなく、「資人」という記載にはツカヒトもしくはツカヒトという訓が付されている。⁽⁴⁾編纂物である『日本書紀』の表現であるから、このことを過大に評価するのは危険だが、少なくとも、天皇をはじめとして皇室に繋がる皇子や王の従者と諸臣の従者との間に差別が当時あったことは認めてよからう。

この差異に関して注目すべきは、『続日本紀』和銅三年(七一〇)

七月丙辰条で左大臣石上麻呂の従者が「舍人」と表記されている事実である。この記事は、大宝令成立までの一時期に諸王以上の従者と諸臣の従者がともに「舍人」と表現されていたことがあり、その遺制が現れたものと考えられる。⁽⁵⁾この「舍人」にトネリとツカヒトという二つの和訓があったとは考えにくく、従ってこの時期には従者は全てトネリと呼ばれていたと考えてよいように思われる。

大宝令制下では諸王の従者（律令制以前のトネリ）と諸臣の従者（同ツカヒト）がともに資人とされているが、これは右の変遷を前提にはじめて合理的な理解ができる。即ち、諸王以上の従者と諸臣の従者が区別されていたのがある時期に「舍人」として一括され、大宝令で前代の二区分とは全く無関係に舍人・帳内・資人という三区分を新たに設定したのである。『日本書紀』の傍訓ツカヒトは、大宝令制下の資人の和訓ではなく、律令制以前の諸臣の従者の和訓であったと考えられる。つまり、大宝令制下の舍人・帳内・資人は全てトネリの範疇に含まれると見做してよく、⁽⁶⁾この観点に立てば、先の木簡の「内資人」はウドネリと読むことができる。

ではなぜ「内舍人」を「内資人」と記したのであるのか。それは、律令制以前のトネリとツカヒトの差別が律令以後にも感覚的に残存したか、もしくは大宝令制下の舍人と資人の差別から、「内舍人」という表記は躊躇され「内資人」という表記がなされたのではなからうか。即ち本稿では、「内資人」は諸王・諸臣に賜った内舍人では

あるという可能性を提案し、以下でこの仮説を検討してみたいと思う。

第一章 内舍人の賜与

内舍人を臣下に賜る初見は、養老三年（七一〇）に舍人・新田部親王に二人を賜ったものである。⁽⁷⁾この時、舍人親王は一品、新田部親王は二品で、ともに当時の皇親中の長老格であり、舍人親王には内舍人二人・大舍人四人・衛士三十人、新田部親王には内舍人二人・大舍人四人・衛士二十人が賜与されている。元正天皇の詔に「今二親王、宗室年長、在朕既重。実加褒賞、深須旌異」とあるごとく、この賜与は、当時の両親王の地位の重要性を天皇自身が認識し、さらにそのことを官人全員に知らしめるために行った措置であった。ただ「其舍人以供_二左右雜使_一、衛士以充_二行路防禦_一」⁽⁸⁾とあるのに、実質的な意義を想定するのは若干の留保が必要であろうと考える（後述）。

この制は平安時代にも継承された。その濫觴は、初の人臣摂政藤原良房である。『日本三代実録』貞観十三年（八七二）四月十日条には、

勅。（中略）朕外祖父太政大臣藤原朝臣、風概沈遠、器度淹凝、摘藤之寄攸_レ帰、擲計之任是重。朕自_レ在_二襁褓_一、頼_レ其保_レ生。

義為君臣、恩過父母。盖有不世之功、須受非常之寵。而鳴謙在_レ心、卑損無_レ已。所以行_ニ顯著之績_一、春秋繁茂、成_ニ隆崇之美_一、不_レ崇_ニ加異之章_一、則恐當時後代將_レ歸_ニ謗於朕躬_一。夫太政大臣、法當_ニ食邑三千戸_一、及隨身兵仗、固有_ニ成式_一。又准_ニ三宮_一給_ニ年官_一、先帝之恩寵也。而至_ニ于封邑_一、固讓_ニ三千_一唯享_ニ三戸_一、隨身等事、皆辭不_レ受。朕以。祿法所_レ當、古賢不_レ辭。既能有_ニ其功_一、居_ニ其位_一。何不_レ食_ニ其祿_一、增_ニ其威_一。然則所_レ辭封邑等事、乖_ニ元老崇班之義_一、非_ニ國家褒飾之心_一。故今不_ニ敢聽_一法、唯_ニ其所_一當。宜_ニ其封戸全食三千_一、以_ニ内舍人二人_一、左右近衛・左右兵衛各六人、為_ニ其隨身之兵_一、又給_ニ帶仗資人卅人_一。年官准_ニ三宮事_一、亦當_ニ奉_レ遵_ニ先帝之遺詔_一。(中略)普告_ニ遐邇_一、令_ニ知_ニ朕意_一。

とあり、良房の比類のない功績に対して、内舍人二人と左右近衛・左右兵衛各六人および帶仗資人三十人を賜っている。注目すべきは「隨身兵仗、国有_ニ成式_一」という一節で、明確な成文法であったかどうかは不明だが、何らかの隨身規定が存したことが窺える。その規定の起源こそ舍人・新田部の両親王への内舍人等の賜与ではなかったろうか。両親王と良房の賜与された隨身の内容が異なるのは、特に功績のあった高官に隨身を賜与するという規定のみで、その内容までは規定されていなかったためと考えられよう。

この記事でもう一つ注目される点は、天皇の側近官として内舍人の他に近衛・兵衛が賜与されていることである。両親王の記事と比較すると、内舍人と内舍人・大舍人、近衛・兵衛と衛士がそれぞれ対応関係にあるようにも思えるが、近衛・兵衛は出身階層や天皇との親近性などにおいて衛士とは同じ武官でも大きな違いがあり、むしろ内舍人・大舍人に近い。

武官という点で注目されるのは、内舍人が武官的性格も合わせ持っている点である。内舍人は職員令3中務省条に、員数九十人で職掌が「帶_ニ刀宿衛_一、供_ニ奉雜使_一、若_ニ駕行分_ニ衛前後_一」と規定されている。令条内でこれらの職掌に対応した規定を見ると、まず「供_ニ奉雜使_一」に関連する条文として、三条文が挙げられる。公式令56諸王五位条は、

凡諸王五位以上、諸臣三位以上、致仕身在_ニ畿内_一、毎季、五位以上、毎年、並令_ニ内舍人一巡問_一、奏_ニ聞安不_一。

で、対応する唐令は、『南部新書』⁽¹⁰⁾卷壬から開元二五年令として、諸文武官職事五品已上、致仕身在_ニ京者_一、毎季、令_ニ通事舍人一巡問奏聞_一。(後略)

と復元されている。⁽¹¹⁾軍防令18節刀条・19有所征討条は、凡大將出_ニ征_一、皆授_ニ節刀_一。辭訖、不_レ得_ニ反宿_ニ於家_一。其家在_ニ京者_一、毎月一遣_ニ内舍人_一存問、若有_ニ疾病_一者、給_ニ医藥_一。凱旋之日、奏遣_ニ使郊勞_一。

凡有_レ所征討、計_二行人_一、滿三千以上、兵馬發日、侍從充_レ使、宣勅慰勞發遣。其防人滿_二一千以上_一、發日遣_二内舍人_一發遣。

であるが、条文中の内舍人に関連した個所は、『大唐六典』卷九通事舍人に唐令条文もしくはその取意文と見做せる文章がある。

凡軍旅之出、則受_レ命慰勞而遣_二之_一。既行、則每月存_二問將士之家_一、以視_二其疾苦_一。凱還、則郊_二迓之_一皆復命。

池田温「唐令拾遺補」編纂をめぐって」では18条相当の開元七年令として復元されているが、「軍旅之出、則受_レ命慰勞而遣_二之_一」は明らかに19条に対応した規定である。以上の三条では唐令で通事舍人が行っている職掌を内舍人が行っており、日本での律令制定時に通事舍人の職掌を内舍人に担当させた過程が確認できる。

一方「帶_レ刀宿衛」に関しては、「供_二奉雜使_一」のように具体的に職掌を規定した条文はないが、考課令32最条に、

勤_二於宿衛_一、進退合_レ礼、為_二内舍人之最_一。

とある前半部分が対応しよう。なお後半部分に関連する条文としては宮衛令19献軍器条が挙げられる。

凡有_レ献_二軍器・戎仗等_一、即令_二内舍人随_二献人_一將_二上_一。

これに対応する唐令条文は管見の限りでは見当たらないが、『大唐六典』卷九通事舍人に記された「朝見引納及辭謝者於_二殿廷_一通奏」という通事舍人の職掌を皇帝と臣下との取り次ぎ役と一般化できれば、内舍人は職員令の規定以外にも通事舍人の職掌を引き継いでい

たと見做せるかもしれない。

「若駕行分_二衛前後_一」は令には関連条文がないが、衛禁律17車駕行衛隊条には、

凡車駕行、衛_レ隊者、杖一百。若衛_二兵衛及内舍人仗_一者、徒一年。謂。入_二仗隊間_一者。誤者、各減_二一等_一。若畜產唐突、守衛不_レ備、入_二宮門_一者、杖七十。衛_二仗衛_一者、笞五十。

とあり(疏略)、内舍人が行幸時に兵衛とともに天皇の身边を警護していたことが確認できる。

以上、内舍人は通事舍人の職掌に対応する文官的な職掌以外に武官的な職掌も有していた。このような内舍人は、公式令52内外諸司条で、

凡内外諸司、有_二執掌_一者、為_二職事官_一、無_二執掌_一者、為_二散官_一。五衛府・軍団及諸帶_レ仗者、為_レ武。太宰府・三閩国及内舍人、不_レ在_二武限_一。自余並為_レ文。

と、「帶_レ仗者」でありながら「供_二奉雜使_一」という文官的職掌ゆえに武官の扱いは受けなかった。内舍人は、天皇の身近に居ることから、自然、時には勅命を帯して使し、また日常的には天皇の身边警護を行った。それを職掌として明文化したのが職員令の規定である。つまり、天皇の側近官という官の性格に全てが収斂されるのである。従って、臣下に賜与された内舍人を単に雑使に供奉する従者と考えたり、また衛士と同列に私的武力の増強と見做すことは、この制

度の本質的理解に繋がるまい。この制度の本質は、天皇の側近官を臣下に賜与する点にこそあると考える。

では、この制度は律令制以前の日本に存在した制度であろうか。

もちろんその当時には舎人は内舎人・大舎人に分化しておらず、また舎人に限らず天皇の側近官を臣下に賜与した例はない。日本が中国の律令制を導入する際には、中国に制度自体が存在しないものを除外すると、①律令などの成文法を模倣し律令条文を作成する、

②中国には成文法としては存在しないものの確実に前代から継承されてきた制度を模倣し律令条文を作成する、③律令など成文法となっている制度を導入するものの律令条文としては規定しない、④中国には成文法としては存在しないものの確実に前代から継承されてきた制度を導入する(律令条文としては規定しない)、という四つの場合が考えられる。⁽¹³⁾内舎人賜与の制度は、この④に該当する諸制度の中の一つではなかったかと考えられる。そこで次に、その中国の制度を章をあらためて考察してみたい。

第二章 班 劍 制

皇帝の側近官を臣下に賜与する中国の制度を唐代までに求めると、南朝期に多く見られる班劍の存在が注目される。班劍に関しては、『王右丞集箋注』にその説明があるので、それを見てみよう。『王右

丞集』は、唐の玄宗・肅宗に仕え尚書右丞にまでなった王維の詩歌集である。王維は、『旧唐書』卷百九十下文苑伝下の彼の伝で「以詩名盛於開元・天寶間、昆仲宦遊兩都、凡諸王駙馬豪右貴勢之門、無不弘席迎之、寧王・薛王待之如師友」と評されるほど、詩文で有名な人であった。この王維の詩歌集に清の趙殿成が注したのが『王右丞集箋注』である。

「班劍」は卷十九の「暮春太師左右丞相諸公于韋氏逍遙谷讌集序」に出ており、その箋注は次のごとくである。

王儉・褚淵碑文、給班劍二十人。劉良註。班劍、謂執劍而從行者也。李周翰註。班劍、木劍無刃、假作劍形、画之以文、故曰班也。任昉竟陵文宣王行狀、虎賁班劍百人。李善註。晋公卿礼秩曰、諸公及開府位從公者、給虎賁二十人、持班劍焉。呂向註。班列也、言使勇士行列、持劍以為儀仗也。通鑑宋紀、勅使班劍及左右排湛。胡三省註。班劍、持劍為班、立在車前。

王儉・褚淵⁽¹⁴⁾は南朝齊代の人。王儉は永明元年(四八三)に太祖高帝の遺詔により鎮軍將軍となり、世祖武帝の即位と同時に班劍二十人を賜与されている。褚淵は宋代の元徽二年(四七四)に班劍二十人を賜与しているが、この時班劍を賜与される地位に昇ったというわけではない。その後高帝の遺詔により録尚書事となり、班劍を加増され三十人となり、さらに薨去時に再度加増され六十人となっている。

竟陵文宣王⁽¹⁵⁾は齊の武帝の第二子。永明五年（四八七）、司徒に正位したのにもない班劍二十人を賜った。その後武帝の遺詔により輔政し、太傅に進むと同時に班劍を三十人に加増されたが、間もなく薨じ「虎賁班劍百人」を賜っている。李善の註に引く『晋公卿礼秩』

の文章は、『晋書』卷二十四職官志にも「諸公及開府位從公者、品秩第一、（中略）給武賁二十人、持班劍」（後略）⁽¹⁶⁾と見える。

虎賁は『統漢書』百官志二（『後漢書』志二十五）に、

虎賁中郎將、比二千石。主虎賁宿衛。左右僕射・左右陸長各一

人、比六百石。僕射、主虎賁郎習射。陸長、主直虎賁、朝会在

殿中。虎賁中郎、比六百石。虎賁侍郎、比四百石。虎賁郎中、

比三百石。節從虎賁、比二百石。皆無員。掌宿衛侍從。自節從

虎賁久者、転遷、才能差高至中郎。

とある。中郎將に付された劉昭の注が引く蔡質の『漢儀』には「主虎賁千五百人、無常員、多至千人」とあり、また郎中に付された注では、「虎賁諸郎、皆父死子代、漢制也」という荀綽の『晋百官表注』を引用している。つまり虎賁は虎賁中郎將の下で宿衛侍從を行っていた官で、中郎將の配下には数多くの郎官がいて、父子代々その職を受け継いだ。『晋百官表注』からすれば、晋にもこの官制が継承されたと考えてよからう。

班劍の規定は、管見の限りでは『宋書』以後の正史をはじめその他の史書にも全く見られない。しかし、『晋書』以後の正史に賜与

記事が散見されることから、その制度は唐まで継承されたと考えてよからう。

劼⁽¹⁷⁾は宋の太祖文帝の長子。六歳で皇太子となり、元嘉三〇年（四五三）に文帝を弑逆し即位したが、江夏王義恭らに敗れ斬首された。この記事では皇太子に班劍が賜与された点と、威儀を高めるために賜与された班劍が潜在的には兵力であった点が注目されよう。

以上の四例は、班劍の員数にしても賜与される官品にしても皇帝の恣意によっており、先述した『晋書』の制度があまり厳密に行われていなかった感が強い⁽¹⁸⁾。従って、『晋書』の制度は一応の目安であり、その官人の廟堂における実際の勢力や、皇帝がその官人を中心に重要視していたかによって、班劍が賜与されていたと結論できる。

班劍という名称のもととなった虎賁の持つ劍は、諸註にあるごとく、模様のある非実用的なものであったらしく、虎賁の役割も威儀を整えることに主眼が置かれ、実際に武力としてはあまり期待されていなかったと思われる。薨去に際して班劍が賜与されているのも、葬儀の威儀を整えるためであったのであろう。

班劍の賜与は晋の東遷後起こった制度であるらしく、⁽¹⁹⁾南朝を通じて行われている。北朝から起こった隋の時代にも、例えば楊素が薨去時に班劍四十人を賜っているごとく、この制度は受け継がれている。問題は、隋の官制に虎賁が見えない点である。⁽²¹⁾「宿衛侍從」

の職掌を持った官を隋の官制中に求めると、左右衛に属する直閤將軍・直寝・直斎・直後と左右領左右府に属する備身がある。煬帝期になると直閤將軍・直寝・直斎が廃され、左右領左右府が改称した左右備身府に直斎が新たに置かれるが、両者の関係は不詳である。

また衛ごとに置かれた護軍が後に武賁郎將と改称されるが、名称が同じだけで前代までの虎賁とは無関係であろう。結局、「宿衛侍從」の職掌は備身に収斂されたと考えてよからうと思う。以上、「宿衛侍從」の職掌を持った官は判明したが、これらの官が班劍として臣下に賜与されたという証左はない。⁽²³⁾

さらに唐でも、例えば、高祖代に秦王世民⁽²⁴⁾（後の太宗）に四十人、齊王元吉⁽²⁵⁾に二十人の班劍が賜与されている。武徳四年（六二二）、兩王は協力して竇建徳・王世充を平定し、凱旋した世民が天策上將・領司徒に、元吉が司空になり、同時に班劍を賜与された。また先述した『王右丞集』から、玄宗・肅宗のころにも班劍制が行われていたことがわかる。⁽²⁶⁾

ただ問題は唐の官制にも虎賁は見えないことであるが、ここで注目すべき記事は、平陽公主の薨去時の記事である。『旧唐書』巻五十八柴紹伝附平陽公主伝では、

〔武徳〕六年、薨。及將葬、詔加前後部羽葆・鼓吹・大輅・麾幢・班劍四十人・虎賁甲卒。⁽²⁷⁾（後略）

とあり、班劍が賜与されていることがわかる。問題は「虎賁甲卒」

で、この条は『資治通鑑』唐紀高祖武徳六年（六二三）二月戊午条では、

平陽昭公主薨。戊午、葬公主、詔加前後部鼓吹・班劍四十人、⁽²⁸⁾（胡注略）武賁甲卒。（後略）

と訓点を施し、「虎賁甲卒」を「班劍四十人」の説明と解している。『旧唐書』の読みを採れば、班劍以外に虎賁が存在したことになり、『資治通鑑』の読みを採れば、武装した虎賁が班劍として賜与されたと見做せる。可能性はどちらもあるが、晋以来の班劍制の前史を考えた時、本稿としては後者を採りたい。⁽²⁹⁾即ち、この例から、前代の虎賁に類似した官を班劍として賜与する制度が唐にも存在したと考えてよいと思う。

以上極めて少ない例を見てきたが、まとめれば次のような結論になる。明確な時期はわからないが、東晋のころから宿衛侍從を職掌とする虎賁を当時の有力な高官に賜与する制度が始まり、南朝を通じてこれが行われた。中国を統一した隋もこの制度を導入し、虎賁類の皇帝側近武官を有力な高官に賜与し、続く唐もこれに因った。この班劍制は、班劍を賜与された官人の功績やその地位の重要性を皇帝が認めていることを表現するための極めて恩典的な制度であると考えられる。

第三章 内資人と授刀資人

第二章では、日本で行われた内舍人を臣下に賜与する制度の源泉であったと思われる中国の班劍制を検討してきた。その結果、ある官人の功績を顕彰するため、天皇・皇帝の側近武官をその官人に賜与し奉仕させた点で、両制度は極めて類似していたことが明らかになった。⁽²⁸⁾

さて、奈良時代において内舍人を賜与されたのは、冒頭に述べた舍人・新田部両親王のみである。平安時代になれば、藤原良房の例に倣って歴代の摂関が内舍人を賜与ようになり、さらにその賜与の対象が一般の大臣・近衛大将に拡大された。⁽²⁹⁾『拾芥抄』中巻院司部には、関白家に御隨身所が設けられ、その構成員として別当・内舍人・番長・近衛が記されており、また「大臣家大略同⁽³⁰⁾摂関。但弁別当・文殿・藏人所等無⁽³¹⁾之。近衛大将同⁽³²⁾之」という註が付されている。

天皇の側近官を高官に賜うという性格は共通しておりながら、奈良時代に諸王・諸臣の高官に内舍人を賜与した例がないのは不自然であると思う。可能性として考えられることは、諸王・諸臣にも内舍人を賜与する制度は存したものの、その内舍人は「内舍人」とは呼ばれず、何か別の呼称で呼ばれたのではないかということである。即ち、それが「内資人」なのではなかろうか。

この想定が正しいとすれば、内舍人をはじめとする天皇の側近官を賜与する制度は親王のみならず諸王・諸臣にも行われていた可能性がある。そこで次に問題となるのは、諸王・諸臣への賜与の例が本稿の「内資人」以外に見られない点である。ただ、親王への賜与の例も先の舍人・新田部両親王への例のみであるから、これと比較すれば問題とする必要はないように思える。しかし、親王・諸王は早い時期に権力から疎外され、賜与の対象となりうるような高官には就任しなくなる。これに対して、藤原氏をはじめとする諸臣は太政官の中樞を占めて、当時の廟堂に重きをなしていく。当然、天皇側近官の賜与対象となりうる官人も多く、『続日本紀』などの史書にその事例を全く見出せないのは極めて不合理である。

この点で注目されるのは、『続日本紀』などの史書に散見する授刀資人・帶刀資人などの存在である。⁽³⁰⁾旧来の論考では、これらは令文に規定されている資人の一形態と考えられており、⁽³¹⁾中には一歩進んで、「授刀」・「帶刀」は私的武力という資人の一面をよく表すものであると考える論考すらある。⁽³²⁾たしかに諸論考が説くごとく、当時の貴族が私的武力を有しており、資人が弓箭に長じ武力を行使した記事も散見される。⁽³³⁾しかし当時の政府がこの傾向に歯止めをかけようと努めたことも確かである。『続日本紀』神龜五年(七二八)四月辛卯条では、

勅曰。如聞。諸国郡司等、部下有⁽³⁴⁾騎射相撲及脅力者、輒給⁽³⁵⁾三

公卿相之宅、有^レ詔搜索、無^ニ人可^レ進。自今以後、不^レ得^ニ更然^一。若有^レ違者、国司追^ニ奪位記^一、仍解^ニ見任^一、郡司先加^ニ決罰^一、准^レ勅解却。其誂求者、以^ニ違^一勅罪^ニ罪^レ之。但先充^ニ帳内資人^一者、不^レ在^ニ此限^一。凡如^レ此色人等、国郡預知、存^レ意簡点、臨^ニ勅至日^一、即時貢進。宜^ニ告^一内外、咸使^ニ知聞^一。

という勅が發布されている。この中の付則規定「先充^ニ帳内資人^一者、不^レ在^ニ此限^一」は、現状の追認とも受け取れるが、むしろ武力に秀でた者を帳内・資人に充てることを今後は禁止する規定と考えた方がよからう。このような状況下で、授刀資人・帶刀資人は国家から武力の保持を許容されている。既に支給されていた位分資人・職分資人の中で一定の員数の武装を認めたという可能性もあるが、本稿では「内資人」との関連を重視し、これらを諸臣に賜与された天皇側近官の別称であると考えたい。

たしかに、第一章で掲げた藤原良房への隨身等の賜与の勅で内舍人・近衛・兵衛とともに帶仗資人を賜っている点を考慮すれば、授刀資人・帶刀資人が諸臣に賜与された内舍人の別称とは考えにくい。しかし、授刀資人・帶刀資人が内舍人よりも出身階層は若干降下することを許容すれば、諸臣に賜与された天皇側近官という「内資人」の性格を共有すると考えてよいと思われる。

『続日本紀』において授刀資人・帶刀資人などを賜与されている事例は、養老四年(七二〇)三月甲子に藤原不比等が右大臣で授刀資

人三十人を、同五年(七二二)三月辛未に長屋王が右大臣で帶刀資人十人(但し『公卿補任』同年条には「帶仗十八人」とある)を、巨勢邑治・大伴旅人・藤原武智麻呂が中納言で帶刀資人各四人を、天平宝字八年(七六四)九月戊申に藤原豊成が右大臣で帶刀四十人を、それぞれ賜与されている。また天平宝字三年(七五九)十一月壬辰には藤原仲麻呂(惠美押勝)が大保で帶刀資人二十人を加増され四十人となっている。従って、これ以前のある時点で仲麻呂は既に帶刀資人二十人を賜与されていたことがわかる。さらに同六年(七六二)五月丙午には六十人を再加増され百人となっている。この時仲麻呂は大師に進んでいた。また、『扶桑略記』天平六年(七三四)三月八日条には「中納言已上、賜^ニ帶仗資人^一」とある。この時の太政官は、知太政官事舍人親王、右大臣藤原武智麻呂、中納言多治比景守という構成であった。

「内資人」や授刀資人・帶刀資人と一般の資人との官としての地位の格差に関しては、双方の出身階層や適用される考選規定の差異を見れば明らかとなろう。一般の資人の出身階層については、軍防令46五位子孫条・48帳内条に、

凡五位以上子孫、年廿一以上、見無^ニ役任^一者、毎年京国官司、勘檢知^レ実、限^ニ十二月一日^一、并身送^ニ式部^一、申^ニ太政官^一、檢^ニ簡性識聰敏^一、儀容可^レ取、充^ニ内舍人^一。三位以上子、不^レ在^ニ簡限^一。以外式部随^レ状充^ニ大舍人及東宮舍人^一。

凡帳内、取_三六位以下子及庶人_二為_レ之。其資人不_レ得_レ取_三内八位以上子_一、唯充_三職分_二者聽。並不_レ得_レ取_三内閣及大宰部内・陸奥・

石城・石背・越中・越後国人_一。

とあるごとく、位分資人ならば外八位以下、職分資人でも六位以下の子であり、「内資人」の実質が内舍人であるという本稿の想定が正しいとすれば、五位以上の子孫の内舍人とは大きな違いがある。

ただ48帳内条に関しては若干の留保事項がある。即ち、大宝令文が右の養老令文と内容であったかどうか——帳内・資人の出身階層の差異が大宝令文でも設定されていたのかという点である。³⁵ 本稿が内舍人と資人の出身階層の差異を問題にする以上、この点が確定していなければならない。このため、本論からそれることになるが、この点に関して若干の説明を加える。

『続日本紀』養老三年（七一九）十二月庚寅条で、

始以_三外六位・内外初位及勲七等子_一、年廿以上、為_三位分資人_一、

八年一替。（後略）

という規定がなされている。この中の「外六位」は、このままでは内外七・八位が抜けてしまい条文自体が不合理であるし、また「外六位以下内外初位以上」という意味ならば合理的だが、それならばこういう表記はしないだろう。従ってここでは、新訂増補国史大系の龍頭に指摘する一本に従い、「外八位」と訂正するのが正しいと考える。「勲七等」については、選叙令集解38五位以上子条古記に

よれば、蔭位制における勲位の扱いが大宝令と養老令で著しく異なるため、帳内条も大宝令の勲位に関する規定を養老令で削除した可能性がある。しかし、本条がその大宝令の規定を改変するために出されたとすれば、もっと適当な表現がなされてしかるべきだと思う。

また「年廿以上」は、正丁の年が二十一以上である（戸令6三歳以下条）のと齟齬を生じるが、一歳下げるだけの改変にしてはこれも不自然な表現である。また「八年一替」も、交替年限（『考選年限』）の改変の規定とすればもっと適当な表現があっただろう。

以上の結果、考えられる改変は、養老令の条文中の「其資人不_レ得_レ取_三内八位以上子_一、唯充_三職分_二者聽」という規定が大宝令にはなく、資人も帳内と同じ規定であったものが、この時に現状の規定になったという改変であろう。もし実際にそうだとすれば、帳内と資人との間に出身階層における差異はなくなり、46条の内舍人の出身規定も大宝令文が不確定であることを考慮すれば、内舍人と資人との間に差異を想定することにも疑問が持たれてくる。

しかしながら結論的には、以下の理由から両者の出身階層の間には何らかの差異があったと考えて差し支えないものと思う。

『家伝』下で藤原武智麻呂について「大宝元年、選_三良家子_一、為_三内舍人_一。以_三三公之子_一、別勅叙_三正六位上_一、徵為_三内舍人_一、年廿二」とあるのは、『続日本紀』同年（七〇二）六月癸卯条の内舍人九十人が始めて補された記事に相当する。この中の「選_三良家子_一」・「以_三

公之子」という表現からすれば、内舎人の出身階層については、大宝令と養老令とはほぼ同規定であったと考えて支障ないと思う。

一方、資人に關しては、内舎人と同じ規定から養老三のの規定に改変されたとすれば、改変の幅があまりに大きすぎる。従って大宝令制下において、位分資人出身階層の制限がなかったとしても、内舎人（Ⅱ「内資人」）と資人との間には出身階層における何らかの差異があったと考えてよいと思われる。

話を本論に戻すと、長屋王等に帶刀資人を賜った養老五年の記事では、賜与記事に続けて「其考選」准職分資人」とある。特に「職分」とされたのは、職分資人と位分資人との間で考選に差異があったからである。『続日本紀』和銅四年（七一）五月辛亥条には、

制。帳内・資人、雖名入式部、不在此予選之限。既叙位記一者許之。職分不在此例、唯聽帳内三分之一、資人四分之一。

（後略）

とあり、帳内と資人の預選法について変更が加えられた。この制によって、帳内と位分資人は一部を除いて預選の対象外とされ、職分資人はこれまで通り選叙に預かることとなった⁽³⁷⁾。ここで若干留意しなければならないのは、内舎人は内長上に准じた考選であるのに対し、資人は内分番に准じた考選である点である。この点に關しては、先述した藤原良房の隨身に内舎人と並んで近衛・兵衛がいたことを想起したい。近衛・兵衛は、天皇の側近官という点で内舎人と共通

した性格を持っている。近衛の前身である授刀舎人もしくは中衛舎人は、兵衛に准じる官でその上に位置する官であり、さらに兵衛は大舎人より若干下に位置する官である⁽⁴⁰⁾。従って、授刀舎人・中衛舎人はほぼ大舎人に相当する階層の官であると考えよう。授刀資人・帶刀資人をこうした近衛・兵衛に比肩する官と考えられれば、「内資人」の諸臣に賜与された天皇側近官という性格を共有する官と見做せよう。しかも帳内・資人の主体が庶人であったとすれば、授刀資人・帶刀資人と一般の資人との実際の階層差はさらに大きなものとなる⁽⁴²⁾。

従って、一般に支給される職分資人・位分資人以外に、本来は天皇に側近する内舎人やそれに准ずる授刀資人・帶刀資人が自分の私的従者として奉仕し、しかもその従者が武力を保持することを公認されているということは、それを賜与された官人にとって大きな君恩であったし、他の官人達に対しても自らの地位の高さを誇示する最も効果的な方法であったと結論できる。

第四章 内資人の本主

以上、親王への内舎人賜与を「内資人」を媒介させることにより諸王・諸臣にも拡大し、さらに「内資人」と授刀資人・帶刀資人などを同一実態を持つものと考えることにより、臣下（Ⅱ親王・諸王

・諸臣)への天皇側近官の賜与が奈良時代を通じて比較的広く行われていたという結論に至った。この結論は、先述した平安時代の制度に円滑に繋がるものであらうと思う⁽⁴³⁾。一つの仮説から出発し、仮説に仮説を重ねていく考察であったが、それから得られた結論はかなり整合性を持ったと考える。そこで本章では、この結論を認めた上で「内資人」を賜与された官人について検討を加えていきたい。

冒頭に示したごとく、「内資人」木簡には「天平八年四月廿日」という日付が記されている。この年(七三六)は、前年に知太政官事の舎人親王が薨じ、右大臣藤原武智麻呂が文字通り太政官首班となつた年である。大納言はおらず、中納言も多治比県守だけで、参議には房前・宇合・麻呂が名を列ねていた。前述の『続日本紀』の記事を考慮して賜与の対象を中納言以上に限るならば、この時点での現任官としては武智麻呂と県守の二名のみである。また、両名ともにこの時点で帯刀資人もしくは帯仗資人を賜与されていたことが確認できる。また、藤原仲麻呂のごとく賜与記事を欠いている場合もあるから、これ以下の官人である可能性も全くないわけではないが、留意する必要はなからう。

これ以外に留意しなければならないとすれば、故人に賜与されている場合であらう。藤原房前の薨去後に故左大臣家が私出挙により食封を運営している例もあるごとく、⁽⁴⁴⁾極めて高位に昇った官人は、故人となつてもその家政機関は

活動を続ける場合がある。この時点で授刀資人・帯刀資人などを生前賜与されていたことが確認できるのは、藤原不比等⁽⁴⁵⁾と長屋王および巨勢邑治・大伴旅人であるが、長屋王は周知のごとき最後を遂げ、巨勢邑治は中納言のまま、大伴旅人は大納言で薨去しているから、考慮の外に置いてよからう。その他高官は数人いるが、授刀資人・帯刀資人などを賜与されていた徴証も全くない。

以上の検討の結果、本稿では、「内資人」を賜与されていた官人として、故藤原不比等と天平八年当時右大臣であつた藤原武智麻呂、中納言の多治比県守の三名を挙げたいと思う。「内資人」木簡が出土した二条大路南側路肩東西溝は、北側路肩東西溝とその出土遺物が共通した性格を持つ⁽⁴⁶⁾。この性格の一つには、藤原麻呂関係の遺物の一群があるということがある。この事実を重視するならば、先の三名からさらに不比等と武智麻呂に絞り込むことができよう⁽⁴⁷⁾。さらに、二条大路の北側路肩東西溝から出土した木簡の中に次のような木簡がある⁽⁴⁸⁾。

・ 中宮職移兵部省卿宅政所

池辺波利 (大島高国) (八多徳足) (史戸廣山)
太宿奈万呂 (川内馬飼夷万呂) (村田口万呂) (大荒木事判)
(杖部廣國) (日下部乙万呂) (東代東人) (太屋主)
(秦金積) 太東人 (山村大立) (陽侯吉足)

・ 狹井石楠

馬國人

他田神口

右十九口舎人等考文錢人別三文成選六文又官仰給智
識錢人別一文件錢今早速進来勿怠緩

大馬 天平八年八月二日付舎人刑部望麻呂
少進

木簡に列記されている十九人は、「右十九口舎人等、考文錢人別三文、成選六文。又官仰給智識錢、人別一文。件錢今早速進来勿_ニ意緩_一」(句読点は筆者)という記載から、中宮職から藤原麻呂邸に出向していた者たちであったことがわかる。注目すべきは、この十九人の中に「内資人」木簡に記された「日下部乙万呂」が見えることである。この木簡には「天平八年八月二日」という日付があり、「内資人」木簡の日付と近接しているから、同一人と考えて間違いなからう。これらの十九人の大半は中宮舎人であらうが、「内資人」木簡からすれば、「日下部乙万呂」のごとき「内資人」が少なくとも幾人かはこの中に含まれていたと言えよう。本来は中宮職に所属しながら、実際には藤原麻呂邸に出向して「内資人」と呼ばれていた「日下部乙万呂」は、故藤原不比等に賜与された内舎人で、不比等の薨去後、宮子のもとに出仕していた者であった⁽⁴⁹⁾、このように考えればどこにも破綻をきたさないのではなからうか。内舎人の考課は一般には中務省で行われ、その際には内舎人自身が考文錢を負担するのであらう。彼らの場合は、現在の本主である宮子がまとめてそれを中務省に貢じるため麻呂家にその取りまとめを指示したものである。以上の想定が正しければ、「内資人」を賜与されていた官人は、不比等一人に限定することができる。

また、二条大路の北側路肩東西溝からは先の「中宮職移」木簡とともに「兵部卿宅」と書かれた墨書土器が出土し、このことから東

院南方地区(左京二条二坊三ノ六坪)は藤原麻呂邸である可能性が大きいとされている⁽⁵⁰⁾。本稿で取り上げた「内資人」木簡は、「中宮職移」木簡と関連づけることにより同様の結論が得られる史料である。「中宮職移」木簡からは、当該地区が中宮職もしくは麻呂邸に比定できた。一方「内資人」木簡に記された「日下部乙万呂」は、「中宮職移」木簡から麻呂邸で勤務していたことがわかり、従って「内資人」木簡は麻呂家で使用・廃棄された木簡であると言える。そして、この木簡が当該地区から出されたものと考えられることから、当該地区は藤原麻呂邸であると結論できる。

お わ り に

以上縷々述べてきたところをもう一度まとめると次のようになる。二条大路南側路肩東西溝から出土した木簡に記されていた「内資人」は、諸臣の功績を顕彰するため、天皇側近官たる内舎人をその官人に賜与したものであった。この内舎人賜与の制度は、中国の南朝から隋唐にかけて行われた班劍制に倣った制度であったと考えられ、『統日本紀』に散見される授刀資人・帶刀資人などは、この「内資人」と同一の系譜にかかる官である可能性が高い。そして、この「内資人」を賜与された官人としては、当時既に故人であった藤原不比等が最も有力な候補として挙げられよう。

不比等が薨去すると、「内資人」は位田・職田や資人などとともに生前と同様に不比等家に供奉する優遇措置を受け、実際には不比等の娘である宮子を公的な本主とし、その中の幾人かは宮子の末弟である麻呂の邸宅に勤務した。「内資人」木簡は、彼らが麻呂邸で宿直勤務を行っていたことを示す具体的史料である。一方「中宮職移」木簡は、公的な本主である宮子の中宮職から実際の勤務地である麻呂家に彼らの考文銭の取りまとめを指示する文書木簡であった。これら二つの木簡が示す以上のような状況は、東院南方地区が藤原麻呂の邸宅であったことを示す有力な傍証の一つである。

本稿で考察した内舍人賜与の制度は、官人の俸禄が官職・位階を対象として給付されているのに対して、天皇の意志の下に特定の官人個人を対象として賜与されている点が特徴的である。特定の官人個人を対象とした賜与は、他にも賜田などがあるが、飾り太刀を帯びた内舍人が常にその官人に付き従う状況は、周囲の人々にとって極めて印象的であり、その官人の地位の高さ、天皇の信頼の厚さなどを示す装置として極めて可視的な恩典であったと言える。

以上の結論は推論の上に推論を重ねたものであり、論述過程において複数の選択枝の中から一つを選んだこともあった。しかし全体的な理解としては、かなり整合性を持っていると考える。今は可能性の一つとしてこの結論を提示し筆を擱く。

註

- (1) 幸運にも筆者は、この発掘現場を見学し、さらに現場で直接取り上げられた木簡が水洗いされて泥が落ちていき、その下から鮮やかな墨痕が現れる過程を目の当たりにすることができた。それだけにこの時取り上げられた数点の木簡には特に深い関心を持っている。
- (2) 『平城宮発掘調査出土木簡概報(二十二)——二条大路木簡 一——』一二頁。なお発掘調査の概要は『一九八九年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』三九頁を参照。
- (3) 順に、皇極二年(六四三)十一月丙子朔条、皇極三年(六四四)正月乙亥朔条、斉明四年(六五八)十一月戊子・庚寅条。
- (4) 崇峻即位前紀(物部守屋の従者)、持統十年(六九九)十月庚寅条(丹比嶋・阿倍御主人・大伴御行・石上麻呂・藤原不比等の従者)。
- (5) 直木孝次郎他訳注『続日本紀 一』(平凡社東洋文庫、一九八六年)では「淨御原令制下で、舍人・帳内・資人の書き分けがあったかどうかは不明で、ここの「舍人」は大宝令前の用字を襲っている可能性も考えられる」としている(一三九頁注八)。
- (6) 大饗亮「律令官制における主従的構成」(一九五九年初発表。のち『封建的主従制成立史研究』風間書房、一九六七年)は、「帳内資人は大化前代の貴人の近習の制をそのまま継承したものであり、職掌の上では舍人・使部・兵衛のそれを包括的に併せもつものである」と結論している(三七頁)。
- (7) 『続日本紀』同年十月辛丑条。
- (8) 森田錦「平安前期を中心とした貴族の私的武力について」(一九七二年初発表。のち『解体期律令政治社会史の研究』国書刊行会、一九八二年)では、「両親王に賜った内舍人以下を当時の権力闘争過程での有力な軍勢力と評価して実質的意義を想定し、また波々伯部守「防閑と馬従——中央貴族の私的武力と関連して——」(横田健一先生還暦

- 記念会編『日本史論叢』、一九七六年）は、内舍人・大舍人は雑使に供奉する従者、衛士は隨身兵であったと文字通りに捉えている。
- (9) 延喜兵部省式近衛条(新訂増補国史大系本七〇二頁)、軍防令47内六位条。
- (10) 以下本稿で用いる中国史料は、『南部新書』と正史(『統漢書』を含む)および『資治通鑑』は中華書局標点本を、『大唐六典』は広池学園本、『王右丞集箋注』は上海古籍出版社標点本を用いた。
- (11) 高橋継男「逸文唐令三条と唐戸令参考資料一条」(『東洋大学東洋史研究報告』Ⅲ、一九八四年)。
- (12) 唐代史研究会編『律令制——中国朝鮮の法と国家』(汲古書院、一九八六年)。なおこの条文に言及したのは坂上康俊氏。
- (13) ①は日唐の比較として一般的に行われている考察の素材となっている。②は例えば、中国の太上天皇・太上皇帝が律令中に規定されなかったのに対して、日本では太上天皇が律令の諸条文中に規定された事例などである(拙稿「太上天皇制の成立」(『史学雑誌』九九・二、一九九〇年)参照)。また③は、唐の鹵簿令が、日本では宮衛令26車駕出入条などから制度としては導入していたことがわかるものの、鹵簿令としては定着しなかった事例などが挙げられよう。
- (14) 『南齊書』卷二十三王儉伝・同褚淵伝。
- (15) 『南齊書』卷四十武十七王竟陵文宣王子良伝。なお竟陵文宣王行狀の全文は『文選』卷六十に収められている。
- (16) ここに「武賁」というのは虎賁のことである。『資治通鑑』唐紀高祖武徳六年(六二三)二月戊午条の胡注に「武賁、虎賁也。唐諱虎字、改爲武」とある。
- (17) 『宋書』卷九十九二凶元凶劭伝。なお『資治通鑑』の引用は、宋紀文帝元嘉二十七年(四五〇)十二月壬午条。
- (18) 晋代の制度と宋・齊代の制度との間には差異があっても不自然では

- ない。しかし晋の琅邪王昱(後の簡文帝)は、それ以前にすでに班劍を賜与されるべき官に進んでおりながら、太和元年(三六六)にいたってはじめて班劍六十人を賜っている(ただし固辞した)、『晋書』卷九簡文帝紀)。則ち、晋代ですら『晋書』の制度は守られていない。従って、晋から宋・齊への制度的変遷を想定するより、南朝を通じて同一の制度だったと考えた方がよく、『晋書』の制度は一つの目安的なものであったと考えるべきであろう。
- (19) 西晋代でも例えば、安平王孚は葬時「介士武賁百人」を賜り(『晋書』卷三十七宗室安平献王孚伝)、賈充も葬時「椎斧文衣武賁」を賜っている(『同』卷四十賈充伝)。この武賁も、皇帝の側近官を臣下に賜与する制度ということでは班劍制の先駆と見做してよいが、いまだ「班劍」という名称は用いられていないため、ここで注記するに止める。なお管見の限りで班劍の初見は、太興年間(三一八―二二)に西陽王冢と荀組が六十人を賜ったものである(『同』卷五十九汝南文成王亮伝附冢伝、卷三十九荀勗伝附組伝)。
- (20) 『隋書』卷四十八楊素伝。
- (21) 後漢に先述のごとき虎賁中郎將を筆頭とした官制があった後は、晋にも先述のごとく虎賁の存在が確認される。さらに『宋書』卷四百百官志下・『南齊書』卷十六百官志に虎賁中郎將が見え、『隋書』卷二百六十六百官志上には、梁代のこととして「(前略)武賁・冗從・羽林三將軍、(中略)武騎之職、皆以分司丹禁、侍衛左右」とあり、陳の記述中では給仕中を筆頭とする品第七の中に武賁中郎將が見える。虎賁中郎將の下に虎賁がいたか、また職掌は後漢と同じく「宿衛侍從」であったかどうかは詳らかではない。しかし梁代の記述から推して、南朝を通じて後漢代の官制が引き継がれたと考える。
- (22) 『隋書』卷二百八十八百官志下。
- (23) 李德林は葬儀に際して羽林百人を賜っている(『隋書』卷四十二李德

林伝)。楊素も薨去時に班劍を賜与されていることと比較すれば、羽林が班劍として賜ったかとも思えるが、隋の官制に羽林が見えないこともあって、断案を得るまでにはいらない。なお羽林については、先述した『統漢書』に、先の記述に続けて「羽林中郎將、比二千石。主羽林將。羽林將、比三百石。無負。掌宿衛侍從。」(後略)とあり、虎賁と同じ職掌を持っていた。

(24) 『旧唐書』卷二太宗紀上。なお『新唐書』の同内容の記事は省略に従う。以下同じ。

(25) 『旧唐書』卷六十四高祖二十子巢王元吉伝。

(26) ただし王維に班劍が賜与されていたとは、王維の官から言って考えられない。恐らく同行していた高官に賜与された班劍であろう。

(27) 『新唐書』卷八十三諸帝公主平陽昭公主伝では「武德六年薨。葬加前後部羽葆・鼓吹・大路・麾幢・虎賁・甲卒・班劍。」(後略)と読んでいる。「大路」は「大略」と同意が、「虎賁甲卒班劍」は一語と見て、若干落ち着きが悪いが「虎賁の甲卒せし班劍」と読んでおく。

(28) 『続日本紀』天平宝字二年(七五八)八月甲子条の官名改変において、兵衛府が虎賁衛になっているこれからすれば、班劍と兵衛が対応する余地もあるように思われるが、この官名改変自体が実質を伴わないものである、官名の一致だけでは何も言えない。

(29) 『国史大辞典』第八卷(吉川弘文館、一九八七年)「隨身」の項(笹山晴生氏執筆)参照。

(30) 笹山晴生「授刀舎人補考——和銅元年天皇御製歌の背景——」(一九八八年初発表。のち『日本古代衛府制度の研究』東京大学出版会、一九八五年)では、帯刀資人は「授刀舎人・帯刀舎人と直接の関係はなく、むしろ平安時代の隨身の先駆的な性格をもつもの」であり、授刀資人は「帯刀舎人とはやや性格を異にするもので、授刀舎人の身分的な性格をもつもの」と考えている(一七四—七五頁、註(13))。笹山

氏は帯刀資人を貴族の私的兵力の公的な制度への編入と見做しているから、次註の諸論考と共通した考え方である。しかし平安時代の隨身は、先の『拾芥抄』よりしても賜与された内舎人・近衛であり、単に貴族の私的兵力に新たな官を与えたのとは本質が全く異なっている。即ち、帯刀資人も授刀資人も、天皇の側近官であるという点では一致するのである。よって、本稿ではこの両者を一括して考察していく。

(31) 藤木邦彦「奈良・平安朝に於ける権勢家の家政について」(『歴史と文化』(東大・教養)一、一九五二年)、横谷愛子「帳内資人についての一考察」(『続日本紀研究』一五二、一九七〇年)、森田註(8)前掲論文、波々伯部註(8)前掲論文など。

(32) 中山薫「資人についての一考察」(『続日本紀研究』八一—一、一九六一年)。

(33) 例えば、若干時期は遅れるが、『続日本紀』延暦元年(七八二)閏正月丁酉条など。

(34) これに類似した制度を中国史上に求めると、甲仗入殿制が最も近いように思われる。しかしこの制度は、班劍制よりもさらに事例が少なく、詳細は全く不明とせざるをえない。少ない事例の中から一例を示せば、先にも触れた褚淵が、宋の昇明元年(四七七)に順帝が即位した際、「甲仗五十人入殿」とある(註(14)前掲褚淵伝)。この記述から想定されるのは、班劍も含めた褚淵の私的従者を武装させたまま宮殿に入れてよいという制度であろう。この制度は「入殿」に重点があるらしく、今問題としている私的従者の武装を許可するという制度とはかなり性格を異にしていると思われる。

(35) 帳内条の義解は「謂。内六位以下子、不_レ論_二嫡庶_一。何者、下文称_二不_レ得_レ取_二内八位以上子_一」(後略)とあり、出身できる対象を内位のみに限っている。しかしながら、「何者」以下は理由になっておらず、もし条文の内容が義解の通りであるとするならば、条文は「帳内、取_二内六

位以下子及庶人^二為^レ之。其資人不^レ得^レ取^ニ八位以上子^一、唯充職分^二者聽^一となるべきである。さらに、外位を除外したとすれば「庶人」の理解が困難となる。即ち、外位を有する者は帳内・資人になれないにもかかわらず、無位の庶人（畿外の者も含まれる）はなれることになつてしまふ。46、48条は、内舍人・大舍人・東宮舍人・兵衛・使部・帳内・資人の出身階層を官の高下に従ひ分類した規定であり、この点からすれば、庶人が外位の有位者より高位に位置づけられる状況はありえない。従つて「六位以下子」は内外位を含み、「不^レ得^レ取^ニ内八位以上子^一」とされた位分資人は、具体的には、外八位・内外初位の子および庶人が出身を許されたと考えねばならない。

- (36) 本稿で言及する条文は養老令条文であり、大宝令条文は、集解古記から養老令とほぼ同文と推定されるものもある。しかし軍防令のごとく集解古記がないため大宝令を復原できない条文に関しては、大宝令施行期の事例を養老令条文を前提として考察するのは、厳密に言えば合理的ではないが、その場合本稿では、両令の条文がほぼ同文であつたという仮定の下に論を進めてきた。

- (37) 野村忠夫『律令政治の諸様相』（塙書房、一九六八年）一四四～五二頁。

- (38) 考課令69考帳内条・選叙令14叙舍人史生条。

- (39) 笹山晴生「中衛府の研究——その政治的意義に関する考察——」（一九五七年初発表。のち註(30)前掲著書）。

- (40) 軍防令47内六位条。

- (41) 野村註(37)前掲著書一五三頁。

- (42) 「内資人」の出身階層に関連して言えば、木簡に列記されていた三名の中、「日下部乙万呂」は、天平宝字八年（七六四）十月十四日付の造東大寺司牒で、同名人が隠岐国目從六位下で故京職宅の返抄に署名を加えている（『大日本古文書』五一～四九六頁）が、両者は同一人であ

る可能性が高い（なお註(47)参照）。また日下部氏は中央でも地方でも見られるが、例えば『類聚三代格』卷十八の養老六年（七二二）二月廿二日付の勅の中に右衛士府督正五位上として出てくる日下部老がいるから、蔭子を出せる可能性はあった。一方「忍坂乙万呂」は、同名人も見えず、近い時期に職事官五位以上の忍坂氏も見当たらないが、いわゆる東国国司の介として忍坂連がみえ、この時点で忍坂氏が大夫層であつたことがわかる（『日本書紀』大化二年（六四六）三月辛巳条）。なお註(2)前掲発掘調査概報五九頁掲載14号木簡には「忍坂乙万呂」が見え、「天平八年五月十一日」の日付からして同一人と見做してよいと思われる。さらに「尾張沙□」については、写経生や写経所関係の舍人に尾張氏が散見するのみである。

- (43) ただし、奈良時代には賜与対象が中納言にまで拡大していたものが、平安時代初期には撰関のみに限定されその後一般の大臣に拡大されていく経過がある。ただ一般の大臣への拡大については、中納言にまで拡大していたという奈良時代の前例があつたからこそ比較的円滑に先述した『拾芥抄』の規定に定着するものと思われる。

また『朝野群載』十二には天禄元年（九七〇）に撰政になったばかりの藤原伊尹への從二位の贈位勅が収められており、その勅文中に「亦賜内舍人二人・左右近衛各四人、以為^ニ隨身^一・伏願。虎賁保警、含^ニ曉刃^一於秋霜。鳥号自張、撫^ニ上弦^一於斜月。新使^ニ盛其權衡^一、以可^レ尊^ニ義形^一」という一節がある。これを見れば、平安時代の内舍人賜与制も中国の班劍制に倣つたものであることは明らかであろう。

- (44) 蘭田香融「『国造豊足解』をめぐる二三の問題」（一九五九年初発表。のち『日本古代財政史の研究』塙書房、一九八一年）参照。

- (45) 『尊卑分脉』藤氏大祖伝不比等伝に、「養老四年（七二二）十月詔贈^ニ太政大臣正一位^一、賜^ニ諡曰^一文忠公。食封・資人、並如^ニ全生^一」とあり（公卿補任）養老四年（七二二）条にも同内容の記述あり、家政機関は不比

等薨去後も存続したと考えられる。

班劍は、薨去時に加増された例があり、薨去後も故人に賜与され続けたと考えられる。「内資人」が班劍に倣うものとすれば、不比等薨去後もその家政機関に包含された状態で不比等家に属し続けた可能性が高い。

(46) 註(2)前掲発掘調査概報五二一六〇頁参照。

(47) これも可能性にすぎないが、「日下部乙万呂」が註(42)で触れた天平宝字八年(七六四)の造東大寺司牒に出てくる同名人と同一人であったとすれば、さらにそこに引用されている故京職宅の返抄の「故京職宅」は、京職大夫であった藤原麻呂の薨去後の家政機関とも考えられる(このことは鬼頭清明「長屋王家木簡二題——赤染豊嶋と竹野女王——」『白山史学』二六、一九九〇年、八九頁)でも既に触れられている。

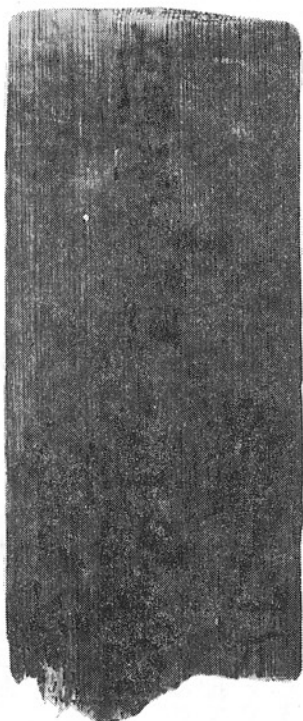
岩橋小弥太「宅司考」『上代官職制度の研究』吉川弘文館、一九六二年)では、家令職員令に規定された親王と三位以上の諸王・諸臣の家政機関は「家」と呼ばれたのに対して、四位・五位の者にも家政機関が許されるようになり、それが「宅」と呼ばれたとしている。しかし、本文で触れた「中宮職移」木簡の「兵部省卿宅」とは、当時従三位であった藤原麻呂の家政機関を指しており、「家」と「宅」とは岩橋氏の想定するような厳然とした差異はなかったと考えてよからう。また、他田日奉部神護が藤原麻呂の位分資人から宮子の中宮舎人になった『大日本古文书』三一五〇頁)ごとく、「日下部乙万呂」が不比等家から麻呂家に移ったと考える余地は十分あるだろう(なお鬼頭氏は「日下部乙麻呂」を一般的麻呂の資人と考えているが、参議の麻呂が「内資人」を賜った可能性は小さい)。

(48) 註(2)前掲発掘調査概報五九頁掲載12号木簡。

(49) 不比等に賜与された「内資人」全員が宮子に付えるようになったのか、あるいは宮子以外にも分かれて仕えていたのかは詳らかでない。

しかし、麻呂家から中宮職に考文銭が支払われていることは、麻呂が「内資人」の管理者に形式上なれず、形式上の管理者はあくまでも宮子であったことを示している。宮子以外に「内資人」の管理者たる正当性を持っていた者がいたとすれば、それは、当時おそらく藤原氏の氏上であったろう武智麻呂と、聖武天皇の皇后であった光明皇后くらいであったろう。

(50) 註(2)前掲発掘調査概報四五・五六頁参照。なお同書では、藤原麻呂邸と推定される邸宅を五坪に少なくとも一坪分全体の敷地を有したと慎重な態度を取っている(三九・六〇頁)が、建物・門の配置などから考えて四町邸の可能性もあり、内裏に近接した最重要地区という点からしてもこの可能性が高いと思う。



釈文は本文一八三頁

〔付記〕

本稿は、東京大学大学院に提出したレポートを改稿したものである。改稿に際しては、東野治之先生と笹山晴生先生から種々の御教示を賜った。記して深甚の謝意を表したいと思う。